

# ホワイトヘッドにおける自己とコスモス

## — 主体の脱構築から連帯へ —

### The Self and Cosmos in Whitehead's Philosophy

平田 一郎

#### 始めに — ホワイトヘッドにおける自己と主体

ホワイトヘッドのコスモロジーの図式において自己(self)は常にその批判的、あるいは逆にホワイトヘッド哲学の擁護者にとっては困難の源となってきた。そういった状況の根本にあるのは、彼の主体(subject)の捉え方が独特なものであることによる。実際彼はアリストテレス以来の主語(subject)－述語(predicate)形式に基づく考え方を批判することにより、実体としてのある永続する主体(subject)が付帯的な属性(attribute)を帯びるという根本的図式から逃れようとする。しかしこのことは同時にそういった主体に永続性がなくなることの意味するし、さらに行為者性(agency)に関しても何かを為す場合に「誰が」為すのかということに根本的な困難を引き起こすことになる<sup>(1)</sup>。そして近代哲学において主体として自己が考えられる以上、こういった形での主体の捉え方は、自己についても、例えば自己の同一性等々諸々の困難を引き起こすことになる。それゆえこういった問題についてはホワイトヘッド研究者の中から幾つかの解決策が提示され、さらにそれを巡っての議論がなされてきた<sup>(2)</sup>。

しかしこの様なホワイトヘッド研究内部での論争とは別に、近年、現代思想一般において特に近代的な意味での主体、自己が疑問視され、脱構築を主張されている<sup>(3)</sup>。そういった中でデリダが語る「自己への不一致」「自己への非同一性への有限な経験」「他者から来る限りの呼びかけ」といったものが、こういった問題への諸々のアプローチからの探求に共通するとされる時<sup>(4)</sup>、先に述べたような状況にあるホワイトヘッド哲学が持つ意義にも新たな光が投げかけられるであろう。即ち従来議論においては、あくまでもわれわれの日常的

な観念に、ホワイトヘッ드의図式をどのようにあてはめるのか、あるいはそういった中でどのようにホワイトヘッ드의図式が破綻するのかといったレベルで問題が探求されていた。しかし現代思想におけるこういった現状を考慮に入れば、むしろホワイトヘッ드의図式が持つ非日常的、ある意味で常識的な直観を越えるあり方こそ、現代において求められているのではないのか、とも言える。

無論ホワイトヘッド自身は自らのコスモロジー（「思弁哲学」(speculative philosophy)とも称する）を「それによってわれわれの経験のあらゆる要素が解釈されうるような、普遍的観念の整合的・論理的・必然的な体系を組み立てる努力である」(PR3)としており、現代思想における脱構築ということとはほど遠いように思われる。しかしむしろそれにも関らず、彼の経験に対する深い洞察が、たくまずして日常的な経験像を乗り越える—それが従来においては、ホワイトヘッド哲学への批判的となり、それを巡って諸々の議論がなされてきた—ということは、彼の哲学的探求がむしろそういった現代にも通じるより広い地平を切り開いているとも言えないだろうか。

そういった観点から本稿ではもう一度、ホワイトヘッドのテキストに即した形で、ホワイトヘッドにとっての主体の問題、そしてそういった主体を基礎にした自己の問題について見ていく。そしてその場合、従来のホワイトヘッド研究における論争に見られたように、日常的な直観にどれだけ合うのかという方向での解釈ではなく<sup>(5)</sup>、むしろそういった日常的な経験像の打破—主体や自己の脱構築という方向からホワイトヘッドのコスモロジーの可能性を考察してみたい。ところで先に述べたように、自己が問題にされる時、通常それは主体として捉えられる。それゆえ先ずホワイトヘッドの図式において主体がどのように考えられるのかを考察しよう。

## 1 主体としての現実的存在

ホワイトヘッドのコスモロジーにおいて、それから世界が形作られる究極的に実在的な事物、言わばモナドとして「現実的存在」(actual entity)が設定される。そしてこの現実的存在とは、諸々の事物に適用されるカテゴリーであるが、ここで重要なのはそういった現実的存在のモデルとして人間経験が考えられているということである。実際「一つの現実的生起 [≡ 現実的存在<sup>(6)</sup>] の諸能

力を一それが実現されるか否かいずれにせよ一記述する際、われわれはロックと共に、人間の経験を形而上学にとって必要とされる普遍化された記述が基づく実例と暗黙の内にみなしてきている」(PR112)。それゆえ「各々の現実的存在は与件(data)から発生する経験の活動(act of experience)と考えられる」(PR40)。

従ってホワイトヘッドの「今現在の人間経験」もまた現実的存在とみなしうる。というよりも、そういった「今現在の人間経験」こそ現実的存在の典型なのである。従ってこういった現実的存在についてホワイトヘッドが述べていることこそ、ホワイトヘッドが人間経験について探究した成果を一般化したものに他ならない。言い換えれば、ホワイトヘッドが人間経験一特にここで問題にする主体や自己についてどのように考えていたのか、ということは現実的存在の定式化に現れているのである。

ここで注意すべきことは現実的存在は経験の活動であると同時に、「それ自らの直接性の主体と呼ばれる」(PR26)ということである。即ち現実的存在は経験の主体でもある。従って現実的存在のあり方こそ、ホワイトヘッドが考える主体のあり方に他ならない。

その場合重要なのは、ホワイトヘッドはあくまでも実体一属性概念を逃れようとすることである。むしろ「経験というものを『多のうちで一であるという自己享受、また多の構造から生ずる一であるという自己享受』を意味するものと解釈する」(PR145)。即ち何か永続する主体が何らかの付帯的な属性を帯びるというのではない。むしろ主体としての現実的存在は多なるものから一なるものとして生成する。この「多なるもの」とはその主体としての現実的存在にとっては先行する過去の諸々の他の現実的存在に他ならない。そういった過去の「多なる他者」を客体として、それから現在の一なる主体が生成する。即ち、主体としての現実的存在はまさにその活動の中で生成する。「現実的存在がどのように生成するかということは、その現実的存在が何であるかということをも構成する。… [現実的存在の]『有』(being)はその『生成』(becoming)によって構成されている」(PR23)。このように「経験の活動」の中でその経験の主体が形成されるということは、言い換えれば、何らかの主体があってその主体の活動として経験があるのであるのではない。ただ経験の活動がありその活動に関与する他者一客体から主体が形成されてくるのである。

そういった過去の「多なる他者」をホワイトヘッドは「現実世界」(actual world)とするのであるが、その場合「現実世界における『客体化』は、一定の現実的存在に対して、その現実的存在が生ずる作用因をなしている」(PR87)。この「作

用因」においては、主体が客体に作用するのではなく、客体が主体に作用する。このことをホワイトヘッドは「客—主関係」(the object-subject relation)(AI175)とも言う。

ただしこれは単純な能動—受動の関係ではない。即ち主体が能動、客体が受動という従来の図式を単純に、客体が能動、主体が受動と逆転したものではない。むしろ「主体としての生起は、客体に対して『配慮』(concern)をもつ、そして『配慮』は同時に、客体を主体の経験における構成要素として位置づけ、情感的色調はこの客体から引き出され、それへと差し向けられている」(AI176)。言い換えれば、そういった客体—他者への「配慮」を持つという点で、ホワイトヘッドにおける主体はその経験の活動の中で、客体としての他者への関係性を保持しているのであり、その限りでその経験の活動において、主体は他者とその構成要素と位置づける。

こういった考え方を具体的に敷衍してみよう。ある経験において主体は、その経験の活動の中で客体としての他者との関りの中で形成されるということは、例えば私が川に落ちた子供を助けるとき、私という主体があって、川に落ちた子供を助けるという活動をするのではない。子供を助けるという活動の中で、「子供を助ける私」という主体が形成されるのである。その場合助けられる子供という客体が「子供を助ける」という活動を引き起こしたとも言えるし、むしろその「子供を助ける」という活動において、「子供を助ける私」が「助けられる子供」というものへの「配慮」によって、その活動におけるある構成要素としてその「助けられる子供」を位置づけたとしてもよい。その場合、経験の活動としての現実的存在が同時に活動の主体である以上、「子供を助ける」という活動は「子供を助ける私」という主体とみなせる。このことはむしろ「子供を助ける」という活動がある側面から見たとき「子供を助ける私」という主体とされる、と言ってよいかもしれない<sup>(7)</sup>。

そしてここで重要なのは、そういった客体としての「他者」に日常的な直観においては「同じ私」である「過去の私」、例えば「子供が川に落ちているのを見た私」「子供を助けようと思った私」も含まれるということである。即ちそういった「過去の私」と、「子供を助ける私」—「現在の私」は実は同じ私ではない、「他者」同士の関係であるということがホワイトヘッドの図式から帰結する。実際「助けられる子供」と「子供が川に落ちるのを見た私」が同じ客体として、「私が子供を助ける」という活動、あるいはそういった活動において形成される「子供を助ける私」の作用因となり、あるいはそういった活動

における構成要素として位置づけられることになる。

このことは現実的存在が活動であり、そういった活動は原子的であって連続的でない、ということ根拠としている。活動が原子的であるということについてホワイトヘッドは次の様に語る。「生成のあらゆる活動には、時間的延長をもつあるものの生成が存在する、というのが結論である。またしかし、活動そのものは、生成したものの延長的可分性に対応している生成の前半の活動と後半の活動とに分割されうるという意味では、延長的ではないということである」(PR69)。この事例に即して言えば、「子供を助ける」という活動はその活動の全期間にわたって単一のものとしてあるのであり、それを分割すると最早その活動はその活動でなくなる。例えばそれが二つに分けられると最早「子供を助ける」という活動ではなく、「川に飛び込む」という活動と「子供を抱いて川から岸上がる」という全く別個の二つの活動になってしまう。

このような活動の原子性から、現実的存在の原子性が帰結する。こういった考え方をホワイトヘッドは「時間の画時理論」(epochal theory of time)と名づける。なぜなら時間とは何よりもそういった原子的な活動の時間として、そういった活動を起源としており、それゆえそういった活動の原子性故に、時間は本来原子的なものであるということになるからである。

ともあれ、それゆえある活動はその活動が完結した時、最早その活動ではなくなるのであるから、その活動は消滅すると言ってよい。言い換えればそういった活動としての「現実的存在は、主体的には『永劫に消え去る』」(PR29)。そして「現実的存在は消滅するが、変化はしない。それはそれであるところのものである」(PR35)とされる。

そしてこういった現実的存在の原子性とは、言い換えれば現実的存在という活動の主体の原子性ということにもなる。即ちその活動に先行する活動の主体と、後続する活動の主体は全く別のものである。そして「消滅した」現実的存在は、後続する現実的存在に対する客体となる。言い換えれば、「子供が川に落ちているのを見た私」は、「助けられる子供」と全く同じ様に「子供を助ける私」の客体となり、「子供を助ける」という活動の構成要素として客体化されるということになる。

## 2 自己と永遠的客体

以上のようにホワイトヘッドは主体を原子的なものとする、言い換えれば個々の活動におけるその場その場の個々の主体へと解体していくことになる。それはまさにデリダが語るところの先行する自己、あるいは後続する自己に対する「自己への不一致」なのであり、あるいは永続しないという意味での非同一性ということになり、さらに原子的な限定性に着目するなら「自己への非同一性への有限な経験」となろう。またそういった主体が客体—他者から形成されつつ、他者へ「配慮」するという事態はまさに「他者から来る限りの呼びかけ」に他ならない。そういった意味でホワイトヘッドは明らかに現代的な主体の脱構築を先取りしていた、としてもそれほど誤りではないかもしれない。

しかしながらそういった主体の脱構築に関してなされる批判もまたホワイトヘッドにあてはまる。即ちそういった形で主体を脱構築していく時、ある行為の責任はどうなるのか、むしろそういった責任を取るためにも何らかの永続する主体が必要なのではないのか、という批判である。そしてまさにそういった批判が、ホワイトヘッドに対しては、以前からなされてきていた<sup>(8)</sup>。同時にこういった永続する主体が責任をとるということは、まさにそういった主体がその行為を為すという行為者性(agency)を有さねばならない、ということにもなる。そこで以上の様な主体の脱構築を前提とした上で、これら諸問題の内、先ず、ホワイトヘッドのコスモロジーにおいてこういった「永続する主体としての自己」がどのように扱われるのかを見ていこう。

永続する主体として自己を考えようとするなら、自己を諸々の主体の連なりとして考えるのが自然であろう。即ち「子供が川に落ちるのを見る」「子供を助ける」「子供の両親に感謝される」といった諸々の活動に対して、「子供が川に落ちるのを見た『私』」「子供を助けた『私』」「子供の両親に感謝された『私』」という形で共通して永続する「私」こそ「永続する主体としての自己」に他ならない、とする。するとその場合、諸々の現実的存在の集団に共通する何かを考える必要がでてくる。

そして「有機体の哲学では、永続するものは『実体』ではなく『形相』である」(PR29)上、「結合体(nexus)は現実的存在の集団である」(PR24)とされる以上、そういった結合体の「形相」として永続する主体としての自己を考えるのが自然であろう。こういった「形相」、言わば諸々の活動に共通するパターンをホワイトヘッドは「永遠的客体」(eternal object)と称する。

しかしこのような共通するパターンとしての形相を、諸々の現実的存在の集団としての結合体が有するということは、その結合体はそういった共通の形相

に秩序づけられているということである。そしてそういった共通の形相に秩序づけられた特殊な結合体をホワイトヘッドが「社会」(society)と名づける限りにおいて、その社会の共通の形相を自己と称しうることになる。さらに「その〔社会の；引用者〕共通の形相が『社会の限定特質(defining characteristic)』なのである。『限定特質』という観念は『実体形相』というアリストテレス的観念と同類である。形相の共通要素は、単にその結合体の各々の成員に例示された複合的な永遠的客体である」(PR34)とされる時、われわれはホワイトヘッドにおいて自己は「限定特質」の一種として規定しうると考えてよいであろう。

特にそういった自己が限定特質であるような社会は、その自己が為す活動が順次つらなつたものであるから、逆にそういったあり方を一般化して、「結合体は( $\alpha$ )それが『社会』であるとき、また( $\beta$ )その成員の類的関係性がこれらの成員を『順次的に』(serially)秩序づけている時『人格的秩序』(personal order)を享受する」(PR34)と言われることにもなる。実際まさにそういった順次的な連なりの中に、前の活動においてなされたことの責任を取る人格というものが見いだされるからである。

ともあれ以上のことからわれわれは、ホワイトヘッドのコスモロジーにおいては、「永続する主体としての自己」は、人格的秩序を有した社会における「限定特質」、即ち永遠的客体とされており、人格の同一性とはまさにこういった永遠的客体の継承、即ちあるパターンとの継承である、と結論してよい<sup>(9)</sup>。少なくともわれわれが、「私」の諸々の活動において共通する主体として自己を考えようとするとき、そういった諸々の活動に共通するパターンとすることは、主体が脱構築され、最早従来永続する主体という考え方を取れない現代において、重要な考え方であると言えよう。そしてまさにそれがパターンであり、主体それ自身でないが故に、諸々の活動における諸々の主体が別個のものとして在りながら、それら別個の活動を共通して「自己の」活動とみなしうるのである。

しかしそのように諸々の現実的存在—諸々の活動を共通して「自己のもの」と見なしえたとしても、そのことがそういった諸々の活動を自己が「為す」ということに直接つながるわけではない。諸々の活動に共通のパターンとして「私」が浮かび上がったとしても、そこから即座にその「私」によって初めてその活動が生じたとは言えないのである。

実際人格的秩序を有する社会の限定特質、即ち永遠的客体として自己を考えるとき、その永遠的客体それ自体はホワイトヘッドのコスモロジーにおいては

行為者性を有しない。なぜなら「永遠的客体は、現実的存在の生成の中へ『進入』(ingression)するその可能態に特有の言葉によってだけ記述されうるということ。そしてその分析は、他の永遠的客体をあらわにするだけであるということ。それは、純粋な可能態なのである」(PR23)とされるからである。そして「単なる可能態としての永遠的客体は、物的実現に関しては未決定である」(PR184)。即ちある現実的存在がどのような現実的存在になるのか、言い換えればいかなる活動を為すのかを決定する、あるいはむしろまさにそういった活動を為すのに、永遠的客体それ自体は何の役割も果たさない。

しかしこのような諸々の活動に共通するパターンとしての自己が、同時にその諸々の活動を引き起こさねばならない、とする根拠は実はどこにもない。実際ある状況において私が為したことで、状況が変わって振り返ってみて、どうしてそのような事を為したのかさっぱり分からない、ということは現実にある。であるなら、そういった両者の状況に共通する「私」—自己が、その両者の行為を為したとしなければならない理由はどこにもない。即ち永続する自己が行為者性を有する主体である必要はどこにも無い<sup>(10)</sup>。

むしろ「確個たる行為主体としての自己」についての確信が揺らいでいる現代においては、永続する自己と主体性—特にその行為者性を分離して、個々の活動の行為者性は、個々の活動それ自体に帰する方がより望ましいのではないのか。それゆえ、行為者性に関しては、こういった諸々の活動に共通な要素について考えるよりも、むしろ個々の活動において、それを何が為すのかということ考察する必要がある。そして個々の活動とは、まさに活動としての現実的存在の生成に他ならず、そういった現実的存在の生成とはまさに客—主関係として多なる客体から一なる主体の生成ということである。それゆえ行為者性に関して個々の活動について考察するためには、ホワイトヘッドのコスモロジーにおける主体の生成を考察しなければならない。

### 3 主体の生成と神

ホワイトヘッドにおける主体の生成、即ち現実的存在の生成は、ある目的論的プロセスによる。即ち現実的存在は多なる客体から一なる主体を生成することである目的を達するのであり、逆に言えばまさにそういった目的因によって主体が生成される。そしてそういった目的をホワイトヘッドは主体的志向



(subjective aim)と称する。その場合、主体とはまさにこの主体的志向の実現に他ならないのであるから、「この主体的志向は、一つの被造物としてのそれ自身の自己創造を決定するこの主体そのものなのである」(PR69)とさえ言われる。

例えば子供を助ける活動が「子供を助ける」という目的に従って生成する一方で、先に述べたようにホワイトヘッドの図式においては子供を助ける活動は「子供を助ける私」という主体と同一のものであった。実際ある活動において生成する主体は、活動そのもの、あるいはそういった活動のある側面から見たものとされたからである。従って「子供を助ける」という目的は「子供を助ける私」という主体そのものである、とさえ言われうる。

こういった主体的志向と現実的存在の関係は、「意図」と「行為」の関係を一一般化したものであるとも言えるであろう。実際心の中である意図を抱いて、その意図を実現することが、その意図に従った行為であるとされる。先の例で言えば「子供を助けよう」という意図を持って現実に身体を動かして「子供を助ける」という行為をなした時、そういった「子供を助ける」という意図の内容が実現されたことになる。その場合まさに意図が目的因として、活動の生成—それゆえ主体の生成を統御することになる。

ここでこういった目的—主体的志向がより具体的にどのようなものであるのか考えねばならない。それについてはホワイトヘッドの次の言葉が鍵となる。

「主体的志向、それは主体の生成を統制しているが、その自己創造の過程で命題(proposition)を実現しようとする主体的形式(subjective form)をもって命題を感受する(feel)主体なのである」(PR25)。ここで主体的形式とは、「その主体がその客体的所与をいかに感受するのか」(PR221)というものである。従って主体的志向とは、主体と見なされる限りにおいて、ある命題を実現しようとして感受するものである、ということになる。

ここでの「命題」とはその目的—主体的志向の「内容」と言い換えても良いであろう。即ち「子供を助けよう」という目的—主体的志向は「子供を助ける」という内容をもってそれを実現しよう(「助けよう」とする。そしてこの内容とは、まさにその活動がどのような活動であるかを決定するパターンであると言っても良い。そしてそれはパターンである限りにおいて何らかの「形相」—永遠的客体の一種であるとも言える。実際「子供を助ける」というパターンは、色々な状況下の活動にあてはめうるものであり、言い換えればそういったパターンは可能態として、諸々の活動において実現されうるものだからである。

従って主体的志向とは、内容としての何らかの永遠的客体を実現しようとする

る目的である。そしてそういった目的が、それを実現する活動—主体と同一であると見なせる限りにおいて、そういった内容として永遠的客体を実現しようとして感受するという主体であるということになる。ここで「観念的感受は、その与件が永遠的客体であるところの感受である」(PR2391)というホワイトヘッドの規定により、永遠的客体を内容として感受するということは、観念的感受(conceptual feeling)が存在するということにもなる。従って現実的存在の生成の過程、言い換えれば主体が生成する「主体的過程の原初相には、主体的志向の観念的感受が存在する」(PR224)

このような図式においてその活動の行為者性をどこに求めるかという時、先ず考えられることはそういったパターンを決定するということを行為者性とみなすことであろう。例えば子供を助ける活動を引き起こしたのは、「子供を助ける」という目的の内容を決定するということに他ならない、とするのである。実際「子供を見殺しにする」「その場を去る」という諸々の選択肢の中から、その状況において特に子供を助ける活動をするに至ったのは、「子供を助ける」というパターンをその過程の目的—意図の内容として選択した、即ちそのパターンを感受したからである、とするのは非常に自然である。このことをホワイトヘッドの図式に従えば、その主体的過程が「どの」永遠的客体を感受するのか—逆に言えば「どの」永遠的客体がその主体的過程に進入するのかを決定するものが行為者性を有するということになる。

このように考える時間問題になるのが「神」である。実際ホワイトヘッドは言う。「その志向の最初の段階は、神の本性のうちに観念的に実現された、事物の不可避的な秩序付けから、その主体が継承する基本財産である」(PR244)。これは、神がある活動における主体的志向において、どの永遠的客体を感受するのかを決定するとホワイトヘッドが主張していると取れる。言い換えれば、全ての活動において、どのような活動を為すのかを決定する、即ちある活動を引き起こす行為者性は神に存在するという立場をホワイトヘッドが取っているように思われるのである。

確かにこの世界の全てを神が決定している、という立場もあるし、特に例えば厳格なカルヴィニストなどが人間の自由意志を認めず、全ての行為は既によりによって決定されていたことを実現するだけだとするのを考えれば、ホワイトヘッドもまたそういった考え方を取っているとすることは不可能ではない。しかし本当にそうなのであろうか？

ここでこの問題をより考察するために先のホワイトヘッドの引用の「神の本

性のうちに観念的に実現された」という部分の意味を考えてみたい。これは要するに、その活動を決定するパターンとしての永遠的客体が、その活動が生成する以前に既に何らかの形で神によって感受されていたということを意味する。これを言い換えれば、既にその活動が生じる前に、神が同じ内容の意図を有していたということであり、それゆえ神によって前もってその活動を引き起こすことが考えられていた、という意味にも取れる。そしてもしそうなら、まさに神によって全て前もって決定されていた、というカルヴィニスト的な人間の自由の否定を意味することになる。

このように世界の全ての活動のパターンを前もって神が感受している、そういった神のあり方をホワイトヘッドは神の「原初的本性」(primordial nature)と称する。そして「神の『原初的本性』は、自らの与件の中にあらゆる永遠的客体を含んでいる諸観念的感受の統一の合生(concrescence)である」(PR87)。そしてここで重要なことは、そういった原初的本性においてある活動のパターンを感受していることが、そのパターンを他の活動が感受する—即ち他の活動へと進入していくことを決定しない、ということである。実際ホワイトヘッドは言う。「単に永遠的客体を心に抱く現実的主体は、それによっては、その心に抱きつつある主体の構造における他の特殊性は別として、ある他の現実的存在との直接的関係にはない、ということである。この学説は、諸々の永遠的客体を完全に心に描くところの神の原初的本性にもあてはまる。神はそれによって与えられた進路には直接関係しない」(PR44)。

即ちある永遠的客体—パターンを神が前もって感受していたとしても、そのことがそのパターンを当の活動が感受する—即ち当の活動にそのパターンが進入していくことを決定することにはならない。その点で原初的本性における神とは決してカルヴィニストが考えるような、全てを前もって決定し自由意志を認めない神とは全く違う。むしろ「観念的感受の实在を許容するかあるいは拒否するかは、現実的生起の独創力ある決断である。この意味で現実的生起は、自己原因(causa sui)である」(PR86)とされる。

無論主体的志向の最初の段階は先に述べたように個々の活動がそのパターンを神から継承するにせよ、そういった最初の段階のパターンによってその活動が完全に決定されてしまうのではない。むしろ主体的志向の後続する諸段階において現実的存在がどのような永遠的客体—パターンを帯びるかを決定するのである。

このようにして現実的生起、即ち現実的存在は「自己原因」であるとされて

いる。するとむしろ行為者性は現実的存在—活動それ自身が有するというのであろうか。その場合、活動はまた主体とも見なせる以上、主体が行為者性を有するという日常的な従来の考え方に戻るとのことになる、とも思える。その点について考察してみたい。

#### 4 自己超越体と行為者性

現実的存在が自己原因であるというホワイトヘッドの規定が矛盾していると批判したのは Pols であった<sup>(1)</sup>。確かにホワイトヘッドはしばしば現実的存在の過程を自己創造的(self creative)な活動であると主張するし、現実的存在を自己原因とするのもそういった主張の延長線上にある。しかし現実にはその過程の活動それ自身は、あくまでも客体からの作用因によるのであって、諸々の活動それ自身の内部からの自発性の余地は無いように思われる。

しかしここで次の言葉に注目したい。「それぞれの個別的な現実的存在は内的には決定されているが、外的には自由である」(PR27)。即ち活動の過程それ自身は、客体からの作用因によって決定されているのであるが、活動が完結して外部に対して客体として作用するとき、それは自由なもの、即ち何らかの行為者性が発揮される余地のあるものとなるのである。

こういった活動の内部と外部に対する両側面をホワイトヘッドは主体と自己超越体という形で定式化し、それらが表裏一体をなしているということを次の様に規定している。「現実的存在は、経験しつつある主体であると同時にその経験の自己超越体(superject)である。それは自己超越的主体(subject-superject)であって、この記述のどちらの半分も、一瞬たりとも見失うことはできない。『主体』という名辞は、現実的存在がそれ自身の実在的な内的構造に関連して考察される場合に最も多く使用されるであろう」(PR29)。即ち活動の過程内部に対しては現実的存在は主体と見なしうるのであり、過程の外部—その活動が完結した後の他の活動に対する作用に関しては自己超越体と見なされる。

こういった現実的存在についてホワイトヘッドはしばしば「有機体」(organism)という言い方もしているが、それゆえ次の様に主張することにもなる。「有機体の働きは、『自己超越体』としての有機体に方向づけられているのであって、『主体』としての有機体から方向づけられているのではない。その働きは、先行する有機体から、そしてすぐ隣接する有機体へ向かって、方向づけ

られている」(PR151)。言い換えれば、ある活動の行為者性は当の活動に対してではなく、外部の後続する活動に対して向けられているのである。

具体的に敷衍すれば、「子供を助ける」という活動を引き起こした行為者性を担うのは、例えば「子供が川に溺れるのを見る」とか、「子供を助けたいと考える」といった、その活動に先行して、既にその活動が為された時には完結した別の活動である。そしてさらに当の「子供を助ける」という活動が行為者性を有するのも、その活動が完結してそれに後続する、例えば「子供の両親に感謝される」「子供が息を吹き返す」等々の他の活動に対してなのである。

あるいは別の言い方をすれば「子供を助けた私」が「子供に息を吹き返させた」のであり、また「子供の両親に感謝をさせた」のである。決して「子供を助けた私」が「子供を助けさせた」のではない。「子供を助けさせた」のは、「子供を助ける」という活動、即ち「子供を助けた私」に先行する活動の主体としての「子供が川に落ちるのを見た私」「子供を助けたいと思った私」となる。

それゆえともかく、ホワイトヘッドにとって行為者性は当の活動の主体が担うものではない。なぜならそういった活動の主体はまさにその活動によって形成され、ある意味でその活動の過程によって決定されるものであって、その活動の過程を決定するものではないからである。しかしそのようにして形成された主体は、後続する活動に対する行為者性を有することになる。実際後続する活動に対しては、すでにその主体は完成されており、しかもその主体は同時に活動それ自身として、後続する活動に作用しうるからである。そしてそういった後続する活動に対する行為者性を有する限りの主体を、ホワイトヘッドは自己超越体と呼んだのである。

もっともこういった自己超越体としての現実的存在は完結しているがゆえに主体的直接性(subjective immediacy)はないとされる。即ち自己超越体とされる限り、そこには過程の内にあつて過程が進行している直接性はない。しかしそういった直接性がないのは、自己超越体となった当の主体に対してであり、その自己超越体が方向づけられている後続の活動の主体においては、直接性が存在する。そしてその限りで、後続の活動の主体にとっては活動的である。ここにホワイトヘッドの行為者性の著しい特徴がある。

これに対して、日常的な直観においては、何らかの活動を為すとき、その行為者性を担う主体において、その活動の直接性がなければならないとされてきた<sup>(12)</sup>。例えば何かを為しているとき、それを為しているという実感が必要であるとされる。そういった「実感」こそここで問題になっている活動の直接

性であろう。例えば手を動かすとき、手を動かすという内感が伴うのが当然であるとされてきたのであり、そういった内感こそが、手を動かすという活動の直接性に他ならないとされた。

しかしヴァーチャル・リアリティの発達した今日、そういった内感にも関わらず、実際の行為がなされていないということは十分にありうるということが分かってきた。むしろそういった内感を感じる活動は、当の行為とは別の活動と考えるべきではないのだろうか。即ち手を動かすという活動は動かされた手の働き及び範囲において直接性があれば良いのであり、それに伴う内感はいむしろ、手を動かすための神経、筋肉などの生理的活動といった、手を動かすという活動とは別の、「それによって」手を動かす活動の直接性であって、決して手を動かすという活動の直接性ではないのではないのか。

あるいは子供を助けるという例で言えば、子供を助ける時「子供を助けている」という直接性—実感を感じるが、その活動に対する行為者性は、決して「子供を助けた私」が担っているのではない。「子供を助けている」という実感を引き起こしたのは、「子供を助ける」という活動ではなく、そういった活動を引き起こした「溺れた子供を見る」とか「子供を助けようと思う」という活動ではないのか。そして「子供を助ける」という活動においては、「子供を助けている」という実感はあっても、それが引き起こした「子供の両親が感謝する」という実感や「子供が息を吹き返す」という実感が無い、という事が、行為者性と直接性との関係を考える時重要なのではないのか。

要するに、自己超越体に主体的直接性が無いということは、行為者性を主観的で内的な実感と切り離すということに他ならない。しかるに日常的な直観においては、しばしば行為者性の有無をそういった主観的で内的な実感と結びつけていたために、ホワイトヘッドの自己超越体に対する定式化が行為者性を定式化しているということが見えなかったのであろう。逆に言えば、まさにそういった内的な実感、即ち直接性との分離という点に、ホワイトヘッドの自己超越体による行為者性の定式化が持つ意義があるとも言える。

このように主体の直接性を切り離すとき、行為者性において最も重要なのは、まさにそれが引き起こした活動の及ぶ、後続の他の活動—他者である。先にわれわれはホワイトヘッドの図式においては、主体の形成に対して、客—主関係における客体という他者が決定的に重要であることを見た。一方行為者性においては、その行為者性を担う当の主体が客体化された他者となって、後続する他の活動の他の主体に関ることになる。あるいはむしろ当の主体—自己超越体

の行為者性の行為者性たるゆえんは、後続する他の活動の他の主体によるのだと言っても良いかもしれない。

このように行為者性を担う自己超越体が何よりも他者との関りによって存在するということを言い換えれば、そういった他者と自己に共通する公共性という形で自己超越体が規定されるということにもなる。実際「事物の公共性に関して考察された現実的存在は『自己超越体』である。すなわちそれは、それが見いだす公共性から生じ、それが伝達する公共性に自分自身を付加する。それは、決定された公共的事実から新しい公共的事実への推移の契機なのである」(PR289)。そしてまさにこういった公共性において自己と他者はある秩序を作り上げ、その秩序の中で相互に依存しあって存在することになる。

### 終わりに—コスモスにおける連帯

われわれはホワイトヘッドにおける行為者性としての自己超越体が、主体的直接性—内的な実感ではなく、何よりも他者との関りの中で初めて意義を持つものであることを見いだした。そしてそのことは同時にそういった行為者性はそういった自己と他者との関る公共性において規定されるということにつながる。

しかしまたそういった内的な実感、即ち主体的直接性を有する主体それ自身の形成においても実は客—主関係という形で他者との関りが否応なしに生じた。これはしかしある意味で当然のことであって、実際公共性に関して考察された自己超越体とは、実は自らが客体化される、即ち後続する他の活動の他の主体に対する客体となることによって、その後続する他の主体を形成することだったからである。

即ちある活動において主体と見なすことは、先行する他の活動の他の主体を自己超越体となして、それによって形成されるということであり、逆にそれを自己超越体と見なすことは、後続するさらに別の活動のさらに別の主体を形成する客体として客体化されるということであった。従って同じ活動を見る方向の違いから、主体とされたり自己超越体とされたりするのである。だからこそ、ホワイトヘッドは自己超越的主体(subject-superject)として両者の不可分の関係を強調していた。

従ってこういった活動は究極的には常に他者との関りにおいて何らかの公共

性の中に身を置かざるをえない。そして同時にそういった公共性は、そのように相互に関り合う自己と他者とが作り上げる秩序を有する。主体は客体化された先行する活動という客体としての他者との関りで形成される一方、自己超越体としての行為者性の行為者性たるゆえんは、その行為者性が引き起こす後続する他の活動によって形成される他者、即ち後続する他の主体にある。従ってそういった自己超越の主体が意味を持つのは、いずれにせよ他者との関りにおいてであり、そういった他者との関りにおける関り方こそ、自己と他者が作り上げる秩序に他ならない。

この場合ホワイトヘッドに特徴的なのは、こういった「他者」が人間に限られないし、またそういった人間以外の自然物と人間とに基本的な違いは存在しない、ということである。だからこそホワイトヘッドの哲学は現代の新たな自然学としてコスモロジーと称されるのである。そのような形で他者として人間と自然物を同等に考えることの意義について詳しく触れる余裕はないが、環境問題等まさにそれが現代において求められているものであることは広く認められつつあることである。さらにそこでの自然物の「自然」とは決して近代自然科学が想定したような、無機的な物の運動、エネルギーの流れではない。まさに「コスモス」としての秩序ある宇宙なのである。

そしてそういった「秩序」(order)を、ホワイトヘッドは普遍的な、あらゆる存在に共通するものとはしない。即ち「全ての現実的存在が達成すべきただ一つの理想的な『秩序』といったもの、あるいは達成しそこなうようなただ一つの理想的な『秩序』といったものは存在しない」(PR83)。そういった意味ではホワイトヘッドの図式に普遍的で超越的な秩序や公共性というものは存在しない。あくまでも内在的な、時間的、空間的に限定された秩序があるだけであり、他者とはそういった秩序を共有する「仲間」(fellow)なのである。

さらにそういった点からホワイトヘッドにおいては、神さえも超越的な創造者ではない、ある意味で同等の「仲間」とされる。実際神の原初的本性において諸々の活動は、神の観念の内容としての永遠的客体を自らの内に客体化するが、それは決して諸々の活動を決定する「主人」であるということの意味しなかった。また「合生的な被造物 [現実的存在 ; 引用者] は、その現実世界の神の客体化における新しい要素として、神のうちに客体化される」(PR345)。こういった神における世界の諸々の活動の客体化が、神の「結果的本性」(consequent nature)である。さらにこういった原初的本性、結果的本性の他に、神から世界への「還帰」としての「自己超越的本性」(superjective nature)ということさえ



言われるが、そういった神と諸々の活動との関係において次のようなことが主張される。「この世界で為されたことは、天国での実在性へと変換され、天国での実在性は、この世界へと帰っていく。こうした往還の交互関係の故に、この世の愛は天国の愛となり、そして再びこの世に溢れこむ。この意味で、神は、偉大な伴侶—理解力ある受苦者仲間(fellow-sufferer)—なのである」(PR351)。ここで「天国での実在性への変換」とは、まさに結果的本性における諸々の活動の神における客体化であり、「天国での実在性は、この世界へ帰っていく」のは自己超越的本性に他ならない。そしてそういった神と世界の諸々の活動との関係において、神は「受苦者仲間」(fellow-sufferer)とされているのである。

従ってホワイトヘッドにおいては、全ての主体はまさに神さえも仲間であるようなこの「コスモス」内における人間や人間以外の他者との連帯(solidarity)の元にある。実際神もまた現実的存在と見なされるのであり、その上で「全ての現実的存在は一つの世界の連帯のうちに存在する」(PR67)とされる。そういった連帯においてこそ、ホワイトヘッドにおける秩序ある宇宙—コスモスのコスモスたるゆえんが存在するのであり、そういったコスモスについての探求として、彼の哲学は「コスモロジーへの試論」<sup>(13)</sup>と題されることになるのである。

## 注

本文、及び注におけるホワイトヘッドのテキストの略号は次の通り

AI: *Adventures of Ideas* (New York: Free Press, 1967)

PR: *Process and Reality* (New York: Free Press, 1978)

- (1) 例えば P. Weiss は早くからそういった観点からホワイトヘッドの図式では自己はうまく説明できないとしているし ("History and Objective Immortality" *The Relevance of Whitehead*, ed.I.Leclerc [New York : The Macmillan, 1961] p.331)、さらに広範かつ徹底的な批判は E.Pols によってなされている (*Whitehead's Metaphysics - A Critical Examination of Process and Reality* [Carbondale : University of Southern Illinois Press, 1967] 以下 WM と略記)。

またこの自己の問題と表裏一体をなす主体についての困難については F.G.Kirkpatrick の批判("Subjective Becoming: An Unwarranted Abstraction?" *Process Studies* 3, 1973 p.15-26)を、さらに行為者性に関する批判については D. Browning の論文("Whitehead's Theory of Human Agency" *Dialogue* 2, 1963-64 p.424-441)や E.Pols の WM の他に、同じ Pols の "Human Agents as Actual Being" *Process Studies* 8, 1978 p.103-113、も参照。

- (2) こういった問題について、ホワイトヘッドの用語でいう「社会」(society)として自己を考えるという解釈は広く認められている(例えば J.B.Cobb, Jr, *A Christian Natural Theology* [Philadelphia: Westminster Press, 1965] 以下 CNT と略記)。なおこのホワイトヘッドに特有な用語としての「社会」については、本稿の「2 自己と永遠的客体」参照)。それに対して、「神」を問題にする観点から R.B.Edwards が批判("The Human Self: An Actual Entity or a Society" *Process Studies* 5, 1975 p.195-203)する一方、R.Fancher は Edwards を再批判("Of Time, the Self, and Rem Edwards" *Process Studies* 7, 1977 p.40-43)する。さらにホワイトヘッドがそのように自己を「社会」として考える立場であるとした上で、J.W.Felt は、それと対照的な連続する流れとして自己を考えるベルクソンの考え方を、知性(ホワイトヘッド)と直観(ベルクソン)の相補的なものとする("Intuitions, Event-Atomism, and the Self" *Process in Context - Essays in Post-Whiteheadian Perspectives* [New York: Peter Lang, 1988] p.137-152)。

またこのように自己を社会とした場合の自己の同一性について、Cobb(CNT)や J.B.Bennet("Whitehead and Personal Identity" *The Thomist* 37, 1973, p.510-521 以下 WPI と略記)は、ホワイトヘッドの図式に基づいた形で論じている。このような永続する自己についてのホワイトヘッドの問題性については J.P.Moreland もまた論じている("An Enduring Self: The Achilles' Heel of Process Philosophy" *Process Studies* 17, 1988 p.193-199)。

さらに注(1)で挙げた先の Kirkpatrick のホワイトヘッドの図式における主体についての批判に対しては、L.S.Ford がホワイトヘッド擁護の立場から再批判している。("Kirkpatrick on Subjective Becoming" *Process Studies* 4, 1974 p.37-41)。

Ford はまた、WM における Pols の行為者性に関する批判に対しても再批判("Can Whitehead Provide for Real Subjective Agency? A Reply to Edward Pols Critique" *The Modern Schoolman* 47, 1970 p.209-25 CWPRSA と略)す

る。さらにその行為者性に関しては J.A.Bracken が、複数の存在の行為者性という新たな考え方でホワイトヘッドを解釈しようとした("Energy-Events and Fields" *Process Studies* 18, 1989 p.153-65)。また最近になって、S.Janusz と G. Webster は行為者性を日常的な意味での人格に帰する形でホワイトヘッド哲学を解釈しようとする("The Problems of Persons" *Process Studies* 20, 1991 p.151-161 以下 PP と略記)。

- (3) 例えば『主体の後に誰が来るのか』(ジャン・リュック・ナンシー編)(邦訳、港道他訳、現代企画室、1996)といった論集を参考。
- (4) これらの言葉は注(3)の前掲書におけるデリダとジャン・リュック・ナンシーとの対話『「正しく食べなくてはならない」あるいは主体の計算』においてデリダによって言われている言葉であり、*Deconstructive Subjectivities*, ed. Simon Critchely and Peter Dews (Albany: SUNY, 1996) の Introduction p.10 において、現代思想における主体の脱構築のキーワードとされている。
- (5) その点で注(2)に挙げた Ford の諸論文はむしろホワイトヘッドの図式に巧妙な区別を導入することにより、日常的直観に適合させることでホワイトヘッドを擁護しよう、という色合いが強い。
- (6) 現実的生起とは、時空的な延長性を有する現実的存在ということで、おおよそ現実的存在と同義としてよい。ただし「神」は時空的に延長した存在ではないから、現実的存在であっても現実的生起ではない、とされる。ただ時空的にある延長をもったものとされる人間の活動を問題にする限りは、両者を同じであると考えても良い。
- (7) 実はここで現実的存在というカテゴリーがどのようなものに適用されるのかという問題について、通常解釈に反する解釈を取っている。通常解釈においては現実的存在は微視的なサブアトミックな活動についてのみ適用されるのであって、ここにある「子供を助ける」という巨視的で日常的な活動に適用されるものではない、とされている。しかし本稿では F. B. Wallack の解釈(*The Epochal Nature of Process in Whitehead's Metaphysics* [Albany: State University of New York Press, 1980])に従い巨視的な活動にも現実的存在が適用できるという立場に立つ。この Wallack の解釈の正当性については、拙稿「ホワイトヘッドの目的論的自然観」『プロセス思想』第五号、行路社、一九九三年、二五-三六頁、及び「因果と創造性」『関西外国語大学研究論集』第六三号、一九九六年、三八七-四〇七頁、参照。
- (8) この問題はホワイトヘッドのコスモロジーにおける道徳の可能性という極

めて重大な問題につながる。そういったホワイトヘッドのコスモロジーの倫理的側面といった問題は、既にホワイトヘッドの生前において P.A. Shilpp が論じて("Whitehead's Moral Philosophy" *The Philosophy of Whitehead* ed.P. A. Shiipp [Eanston : Northwestern University Press, 1941] p.561-618)以来、多くの議論がなされてきた。しかし本稿ではこの問題について正面から触れる余裕はない。あくまでも「永続する主体としての自己」と「行為者性」の可能性と必要性、という点からのみホワイトヘッドのコスモロジーを探求するのであり、ホワイトヘッドにおける倫理や道徳について論じるのは別稿に譲りたい。

- (9) もっとも Cobb は CNT において、自己の同一性に関してこういった一般的なパターンの継承ではなく、ホワイトヘッドが「独自の完結性を持った」(PR161)と言う特殊なパターンの継承に注目している。しかし Bennet が WPI で論じているように、ある文脈においては自己をこういった一般的なパターンの継承として捉える必要もある以上、本稿ではそういった特殊なパターンの継承も含むより一般的な定式化を探ることにしたい。
- (10) にも関わらず、S.Janusz と G. Webster は PP において人格をも現実的存在と見なして、永続する自己と行為者性を有する主体をホワイトヘッドの図式において一致させようとする。ここにもむしろ日常的な直観にホワイトヘッドのコスモロジーを無理に適合させようとする、Ford などと共通する態度が見られる。
- (11) WM p.113-125
- (12) 自己超越体におけるこういった直接性の欠如ゆえに、Pols は WM においてホワイトヘッドの自己超越体を主体的な行為者性を担うものとは見なさず、むしろ決定論的な因果性とのみ考えて、ホワイトヘッドの哲学における自由の欠如を批判した。それに対して Ford は、そういった直接性と行為者性の結びつきについての前提を Pols と共有した上で、CWPRSA において極めて精緻な区別をホワイトヘッドの図式に持ち込んでホワイトヘッドを擁護しようとした。しかし以下に述べるような直接性と行為者性の分離ということを認めるならば、そのような両者の論争は無意味なものであることが明らかになる。
- (13) ホワイトヘッドの名著である『過程と実在』の副題とされている。